

令和7年度第1年次入学者一般選抜学力検査問題 解答例

数 学

[ 1 ]

(1) 2次方程式の解の公式より,

$$p = \frac{1 + \sqrt{5}}{2}, q = \frac{1 - \sqrt{5}}{2}$$

(2) (1)より,  $p - q = \sqrt{5}$ である。

また, 解と係数の関係より,

$$p + q = 1, pq = -1$$

したがって,

$$a_2 = \frac{1}{\sqrt{5}}(p^2 - q^2) = \frac{1}{\sqrt{5}}(p + q)(p - q) = 1$$

$$a_3 = \frac{1}{\sqrt{5}}(p^3 - q^3) = \frac{1}{\sqrt{5}}(p - q)(p^2 + pq + q^2) = \frac{1}{\sqrt{5}}(p - q)\{(p + q)^2 - pq\} = 2$$

(3) (1)より,  $a_1 = \frac{1}{\sqrt{5}}(p - q) = 1$ である。したがって,

$$b_1 = \frac{a_2}{a_1} = 1$$

であるので,  $n = 1$ のときは成り立つ。 $b_k$ が正の有理数であるとする。

$p, q$ は2次方程式  $x^2 - x - 1 = 0$ の解であるので,  $p^{k+2} - p^{k+1} - p^k = 0$ ,  $q^{k+2} - q^{k+1} - q^k = 0$

が成り立つことに注意すると,

$$b_{k+1} = \frac{a_{k+2}}{a_{k+1}} = \frac{p^{k+2} - q^{k+2}}{p^{k+1} - q^{k+1}} = \frac{p^{k+1} + p^k - (q^{k+1} + q^k)}{p^{k+1} - q^{k+1}} = 1 + \frac{p^k - q^k}{p^{k+1} - q^{k+1}} = 1 + \frac{a_k}{a_{k+1}} = 1 + \frac{1}{b_k}$$

が成り立つ。 $b_k$ が正の有理数であるので,  $b_{k+1}$ も正の有理数である。よって, 数

学的帰納法により, すべての自然数  $n$ について,  $b_n$ が正の有理数である。

(4)  $r > 1$ より,  $h > 0$ を用いて,  $r = 1 + h$ とおくと, 与えられた式より,

$$r^n = (1 + h)^n = \sum_{k=0}^n {}_n C_k h^k$$

が成り立つ。 $h > 0$ であるので,

$$r^n = (1+h)^n \geq 1+nh$$

が成り立つ。 $\lim_{n \rightarrow \infty} (1+nh) = \infty$ であるので、 $r > 1$ のとき、 $\lim_{n \rightarrow \infty} r^n = \infty$ が成り立つ。

(5)  $r = 0$ のとき、 $\lim_{n \rightarrow \infty} r^n = 0$ である。したがって、 $|r| < 1$ で $r \neq 0$ とすると、 $|r|^{-1} > 1$ であるので、(4)より、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} |r|^{-n} = \infty$$

であることに注意すると、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} |r^n| = \lim_{n \rightarrow \infty} |r|^n = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{|r|^{-n}} = 0$$

が成り立つ。したがって、問題文にある結果より、 $\lim_{n \rightarrow \infty} r^n = 0$ が成り立つ。

(6)  $r = \frac{q}{p}$ とおくと、 $|r| < 1$ であるので、(5)より、 $\lim_{n \rightarrow \infty} r^n = 0$ が成り立つ。したがって、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} b_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{p^{n+1} - q^{n+1}}{p^n - q^n} = \lim_{n \rightarrow \infty} p \frac{1 - r^{n+1}}{1 - r^n} = p = \frac{1 + \sqrt{5}}{2}$$

[2]

(1) 余弦定理より,

$$\cos \theta = \frac{5^2 + 6^2 - 7^2}{2 \cdot 5 \cdot 6} = \frac{1}{5}$$

また, この結果を用いて,

$$\vec{b} \cdot \vec{c} = |\vec{b}| |\vec{c}| \cos \theta = 6$$

(2) (1)より,

$$\sin^2 \theta = 1 - \cos^2 \theta = \frac{24}{25}$$

である。

$0 < \theta < \pi$ より,

$$\sin \theta = \frac{2\sqrt{6}}{5}$$

となる。よって,

$$S = \frac{1}{2} |\vec{b}| |\vec{c}| \sin \theta = 6\sqrt{6}$$

(3) Dは辺BCを5:6に内分する点であるので,

$$\overrightarrow{AD} = \frac{6\vec{b} + 5\vec{c}}{11}$$

(4)

$$BD = \frac{5}{11} BC = \frac{35}{11}$$

であるので, Iは線分ADをAB:BD = 11:7に内分する点である。したがって,

$$\overrightarrow{AI} = \frac{11}{18} \overrightarrow{AD} = \frac{1}{3} \vec{b} + \frac{5}{18} \vec{c}$$

(5)  $\overrightarrow{AH} = s\vec{b} + t\vec{c}$  ( $s, t$ は実数)とおく。 $\overrightarrow{AB} \perp \overrightarrow{CH}$ と(1)より,

$$\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{CH} = \vec{b} \cdot (s\vec{b} + t\vec{c} - \vec{c}) = s|\vec{b}|^2 + (t-1)\vec{b} \cdot \vec{c} = 25s + 6(t-1) = 0$$

同様に,  $\overrightarrow{AC} \perp \overrightarrow{BH}$ と(1)より,  $6(s-1) + 36t = 0$ を得る。したがって,

$$25s + 6t = 6, \quad s + 6t = 1$$

これを解いて,

$$s = \frac{5}{24}, \quad t = \frac{19}{144}$$

となる。よって,

$$\overrightarrow{AH} = \frac{5}{24} \vec{b} + \frac{19}{144} \vec{c}$$

[ 3 ]

$$(1) \quad \frac{a}{1-x} + \frac{b}{1+x} = \frac{a+b+(a-b)x}{1-x^2} \text{ より, } a+b=1, a-b=0 \text{ である。}$$

$$\text{したがって, } a=b=\frac{1}{2}$$

$$(2) \quad \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos x} = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{\cos x}{\cos^2 x} dx = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{\cos x}{1-\sin^2 x} dx$$

$t = \sin x$  とおくと,  $dt = \cos x dx$ ,  $x$ が0から $\frac{\pi}{4}$ に変化すると $t$ は0から $\frac{1}{\sqrt{2}}$ に変化する。したがって, (1)より,

$$\int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos x} = \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \frac{dt}{1-t^2} = \frac{1}{2} \int_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} \left( \frac{1}{1-t} + \frac{1}{1+t} \right) dt = \frac{1}{2} \left[ \log \left| \frac{1+t}{1-t} \right| \right]_0^{\frac{1}{\sqrt{2}}} = \log(\sqrt{2}+1)$$

(3) 部分積分法によって,

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos^3 x} &= \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{(\tan x)'}{\cos x} dx = \left[ \frac{\tan x}{\cos x} \right]_0^{\frac{\pi}{4}} - \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{\tan x \sin x}{\cos^2 x} dx = \sqrt{2} - \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{\sin^2 x}{\cos^3 x} dx \\ &= \sqrt{2} - \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{1-\cos^2 x}{\cos^3 x} dx = \sqrt{2} - \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos^3 x} + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos x} \end{aligned}$$

したがって,

$$2 \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos^3 x} = \sqrt{2} + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos x}$$

(2)より,

$$\int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{dx}{\cos^3 x} = \frac{\sqrt{2}}{2} + \frac{1}{2} \log(\sqrt{2}+1)$$

(4)  $x = \tan \theta$ とおくと,  $dx = \frac{1}{\cos^2 \theta} d\theta$ ,  $x$ が0から1に変化すると $\theta$ は0から $\frac{\pi}{4}$ に変化する。したがって,

$$\int_0^1 \sqrt{1+x^2} dx = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{\sqrt{1+\tan^2 \theta}}{\cos^2 \theta} d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{d\theta}{\cos^3 \theta}$$

(3)より,

$$\int_0^1 \sqrt{1+x^2} dx = \frac{\sqrt{2}}{2} + \frac{1}{2} \log(\sqrt{2}+1)$$

(5)

ア.  $\frac{dx}{dt} = \cos t$ ,  $\frac{dy}{dt} = -\sin 2t$  より,

$$\begin{aligned} |\vec{v}| &= \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2} = \sqrt{\cos^2 t + \sin^2 2t} = \sqrt{\frac{1 + \cos 2t}{2} + (1 - \cos^2 2t)} \\ &= \sqrt{-\left(\cos 2t - \frac{1}{4}\right)^2 + \frac{25}{16}} \end{aligned}$$

したがって、 $|\vec{v}|$ の最大値は  $\frac{5}{4}$

イ.

$$L = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2} dt = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \sqrt{\cos^2 t + \sin^2 2t} dt = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \cos t \sqrt{1 + 4 \sin^2 t} dt$$

である。ここで、 $x = 2 \sin t$ とおくと、 $dx = 2 \cos t dt$ 、 $t$ が0から $\frac{\pi}{6}$ に変化する

と $x$ は0から1に変化する。したがって、

$$L = \frac{1}{2} \int_0^1 \sqrt{1 + x^2} dx$$

(4)より、

$$L = \frac{\sqrt{2}}{4} + \frac{1}{4} \log(\sqrt{2} + 1)$$

[ 4 ]

(1)

ア. 3回の試行で起こりうる取り出し方の総数 $10^3$ 通りのうち, $S=3$ であるのは, 取り出した玉に書かれた数字の組合せが,  $(0, 0, 3)$ ,  $(0, 1, 2)$ ,  $(1, 1, 1)$  のいずれかとなるときである。よって,  $S=3$ である確率は

$$\frac{{}_3C_2 \times {}_1C_1 + {}_3C_1 \times {}_2C_1 \times {}_1C_1 + {}_3C_3}{10^3} = \frac{1}{100}$$

イ.  $S=9$ である取り出し方の総数は,  $a_1 + a_2 + a_3 = 9$ となる  $0 \leq a_k \leq 9$  ( $k=1, 2, 3$ )の選び方の総数と等しい。これは, 異なる3個のものから重複を許して9個取る組合せの総数となるので,

$${}_{3+9-1}C_9 = {}_{11}C_9 = {}_{11}C_2 = 55$$

よって,  $S=9$ である確率は

$$\frac{55}{10^3} = \frac{11}{200}$$

(2)

ア.  $n=1$ のとき袋に入っている玉の数は全部で16個であり, 袋から3個の玉を同時に取り出す場合の数は ${}_{16}C_3$ である。取り出した3個の玉がすべて異なる色となる場合の数は, 白玉が1個取り出される場合の数 ${}_7C_1$ , 赤玉が1個取り出される場合の数 ${}_8C_1$ , 青玉が1個取り出される場合の数 ${}_1C_1$ の積となる。

よって, 求める確率は

$$p_1 = \frac{{}_7C_1 \times {}_8C_1 \times {}_1C_1}{{}_{16}C_3} = \frac{1}{10}$$

となる。

イ. 玉の数は全部で $n+15$ 個であり, 袋から3個の玉を同時に取り出す場合の数は ${}_{n+15}C_3$ である。取り出した3個の玉がすべて異なる色となる場合の数は, 白玉が1個取り出される場合の数 ${}_7C_1$ , 赤玉が1個取り出される場合の数 ${}_8C_1$ , 青玉が1個取り出される場合の数 ${}_nC_1$ の積となる。

$$p_n = \frac{{}_7C_1 \times {}_8C_1 \times {}_nC_1}{{}_{n+15}C_3} = \frac{7 \times 8 \times n}{(n+15)(n+14)(n+13)} = \frac{336n}{(n+15)(n+14)(n+13)}$$

よって,

$$\frac{p_{n+1}}{p_n} = \frac{336(n+1)}{(n+16)(n+15)(n+14)} \times \frac{(n+15)(n+14)(n+13)}{336n} = \frac{(n+1)(n+13)}{n(n+16)}$$

ウ.  $\frac{p_{n+1}}{p_n} > 1$  となる  $n$  は, イ. より,  $(n+1)(n+13) > n(n+16)$  を解いて  $n < \frac{13}{2}$  で

ある。同様に,  $\frac{p_{n+1}}{p_n} < 1$  となる  $n$  は  $n > \frac{13}{2}$  である。

したがって,

$$p_1 < p_2 < p_3 < p_4 < p_5 < p_6 < p_7 > p_8 > p_9 > p_{10} > \dots$$

が成り立つので,  $p_n$  が最大となるのは  $n=7$  のときである。